



中村俊定文庫
文庫 18
581



天明二

壬寅初懷年



園の柳や花のまゝあけ年の
 うらみはのさかしく戸を
 けふは花のあけ年の水
 づきをさかしくあけ年の
 入事やけふと一毎に初懐
 ひくく見しとそやそと文
 筆のものをとり出さし
 たりおこさしは松のたわ
 ちりうせは正木のかつ
 春の日のさかしくあけ



天明壬寅春

春夜樓晋明



正月十一日於春夜樓與行

俳諧之連歌

几世

万葉の舞の色は甲梅の門

東風あそぶのきも五日とらふ

白魚のあそぶる浪のりけ舟のこ

起即やうよく旅の希く人

酒の香乃菊屋といふたのりん

かうとらうくくと夜つる月

熊三

湖柳

是若

万容

路曳

解あそびありれど一の秋も去

ひとの後中一と咲あらうふさ

住あれぬ草の寒もをりしのひ

顔見世競ふ、春のあつた

川物よとむ芥さけ舟入て

村亦買て僧と連とら

手敲く田舎をのむ花の隈

笠履あらし世を蛇の出る所

魚赤

自珍

志逸

杉月

湖虫

之兮

九湖

橘仙

方名おき 糸果より 夕月夜 我則
 車一のほりありて 奇よむ 都凡
 雨ふれて あゝ免の扇を 雷夫
 男よ出さく 兄や乃人 魚目佛
 短衣の鐘鳴り 方とよむ 仙魯
 成りふ立し 青徳乃 蚕奴

右一順下畧

分題

燈をとも 梅のすいしや 丸月 九湖
 溝川や水澄くよむ 芥のふ 魚赤
 もの音のせぬ 猫の志 万容
 腰のけそめ 喉ふよ 菓の燕 路曳
 紅梅や吹雪を ねむり 中皮 都風
 風たきを 紙鳥の糸 踏川 橋仙
 我中干 次北日 戸の栞や 花いけ 自珍
 指中や 愛宕 舞 考ののせ 舞中

川もよや舟もあつゝま維の巻 湖柳
新登意の志も白ぬるま 湖虫
業平乃通後ノ帝 蛙の如 仙魚

當日文信二句 浪華

氣を風くま井の聲句ひまよ竹裏
小松川もよを深まふおんひま くら

同席上

陽火くや菜をひくあゝの荒れ畑 之号
雲降日ともましつとけ 柳の如 志遠

青石のまをを踏やま乃水是岩

やふ入や舟寐起さぬ 熊三
ま弱やおまぬまもの 杜喬
白魚の中ををぬ出る小海をらん 杉月
海苔鮎や鰯の小魚のあつゝま 魚佛
塩漬のま芽や袖の玉産まの 登奴
蝶くの曉起や 雨のくま 素次
寶引くますくまをくまをくま 雷夫

下敷やまゝく子殿乃二三寸芦江
蜂の巣やユミ〜して軒の下少年如菊
墨筆のほ毛のうられ二日灸車紫

四つ色の京の日乾や 現うり涼化
梅柳 狹社が町の七保うら 芝山
野へわれを名も忘れぬ子 春の州 我則

せうろ〜こ〜り〜ぞ〜申

去、蕎麦生ふ畑うする北山の後 鴨東

芭蕉庵下

山田氏の息七すあ〜そよ〜
俳諧の句を糸に〜あ
雅遊〜し〜し〜あ〜そ〜終日
父の右〜を上げ〜燭を〜え
眠〜し〜益神〜新〜あ〜い
かの玉戒〜あ〜ひ〜と〜あ〜う〜り
似〜と〜つ〜ひ〜し〜る〜

七才見

あの梅の咲〜と〜乳母〜在〜所〜ぬ 亀号
〜と〜指〜ある〜る〜あ〜乃〜乃〜州 之号
夕風〜と〜萩の敷〜け〜お〜ん 晋明

其引

梅のやあや花訪を龍年し鶴汀

茶碗はくする窓のまげうふ晋明

巢を穿つ雀の夫婦ん志んれん花打

春興

吸りあをを柳せ落のとう鶴汀

手越上るかさの西見や七草とり花打

樊中一類へるものふれ音も

いづれいしふんれん

晋明

鳥や此もとはりもあつりま

正月十八日於伏水興行

歌仙一折

春坡

いよ啼し鳥をんる垣根か

数あをを叶もみりかあふ晋明

一夜降春の朝のを旅へ出て松化

川越へるる志をいづる買山

さ涼月を誓火けりふ家る鹿卜

楢川 ぼろろ 禪云三昧 紙筆

名を信は知識と人を察志で
 志の心の勅使前もまじり
 及芝のやうな起臥あ良の麻
 あと茶のけりしゆいたあひく
 役駕の又とされり小百姓
 雪原く居る人うおひふ
 杖遊く時とおおひ月ゆり
 是くうゆる 鏡一面
 山ト化坡ト山坡明

出舟待雨のはまなく意を
 越の例 く空をふぶか
 きさくふ一本の木のあつう
 足もととよき志の免の雉
 山ト化坡ト

後宴探題

夕さぬを立を鳴流の蛙の如
 おおらうねや西くまゐる市己心の鐘
 みほく柳くまらようあう蕨草
 春坡 松化 和笑

老を好む水も物も此川辺に 買山
雪とげや再はもる みの泡 鹿下
島山のけりともふんそ かの梅 峯
さかしの芥も捨つ藪の枝 其韻
あゝあゝ落る又ささく椿かぬ 可正
岩角の日くまやりく雪解け 湖陸

伏水眺望

去る梅も餘寒のまのかりゆ也 董

正月廿一日

於春夜樓中

俳諧之連哥

道立

淡かき梅を尋るつきんせ

残る雪ちる老の山うせ 晋明

苞の獨活ゆるりの色乃抱く 燕村

ゆるおふ人の刀みく 百池

湯上りの月涼しさを七日 月居

山の屋うけのよすれ 若さく 佳棠

子と乳をせしめて犬の眠みむ 正巴
くさくさ可なりーさなめらう 遊 之号
川と添て濃酒を賣村をられ 我則
あまふ 榎の枝きりぬる 熊三

當座

さしふも春のものや ぬの智 道立
春雨や智母院町の旅やとり 正巴
啼ひえー 奇楠を二度煙やそのぬ 維約

春をー 梅の伏尻くちとら 啼け 百池
豆腐さへ食ふー 又里や花のとも 佳棠
やー さふよ 妙や ちうくく 雛の色 熊三
雛子鳴や白ふ酒うる家の後り 之号
野を焼くかゝ帰もさくす 鳴 我則
春雨やかしう 落す 小傾 城 月居

春景二句

堤ゆく牛の影は由春の水 几董
逢ふ日や雉の下りたる 橋の上 蕪村

春鳥

おちらぬや地下もゆるはの友 田福
志く梅や出花元くるぬ屋花 自笑
その雨むうとちりぬおちる月 定雅
紛れて々鳥草の入るや田螺笠 存固
連翹やあかきく立てて花ささり 婆雪
折枝いづきささる 柳 一うね 来雨
御入る 烟よりささりやぬかす 二貞
冬居る北戸へおれを帰居る 百樓

春鳥

下鴨の比枝まきほくおぬ 徳野
春のぬや隣くるはよ錢の音 文皮
腕伽椰やひよるる梅のま 舞岡
のころちや翌のりおのちりる 才馬
とりくるおに弦ありすこれ 柳 管鳥

青柳や池く音あふ 流乃糸 心頭
春の雪すけあふ屋の垣根外 五雲

春興

山里や 厠ししきよき 考の水 狼の獅

美の蛇や岩を落来る 水のあら 邦洞

くまくや堤をけりる 孫の歌 居用

けのまや犬追ぬし 藏の同 五風

廿數垣をもるしあらや也し 椿 蟹公

東波より書言

くちも寐ぬをあくくこもやるれ 猫海 希里

一三里を旅のましめ乃 梅見のぬ 古友屋

雨のちく、雪降る氣やけの葉くり 浪草 旧國

花のゆめとらや丈余の雪の上伏水 鷺喬

百年乃 柳十節のみくり外 大津 棋道

明る他のかきを梅のまぬきり外 仙庵 卧央

春興

敏馬浦

わーお交て色ありやうふ本草外 士川
薄板く嵐のあとや 籠のくかん 士あ
七ふ日を旅とふあてあうきさう 士巧

けあ限子垣をきるふを海をひ 佳則
けめくる水く影さふ 柳のぬ 其東

登句書く扇拾ひ色春の州 守明

運筋の火振ひくや 落 栲 曾雨
み梅や春日磁の瓶 乃買合也 菊十

楮干 栴の目あうや 伐の屋 何 来也 兵庫
山賊子 剥れそ 板の栴白 里由
さ子 馴てしききさる椿のぬ 清丈
雲ありて先買あてあけ 花の山 敏馬

陽光のうらや花ふよ 躑躅より 月居

菜のむやみしく眠るの上但馬岡山
花の雨基をうつ人を寐さけり、百歩
はれ立てて峰をりり、江をりり、止秋

千年と伝はる古ふ柳ハル東助
水仙の香や鼻をつく梅の尻子曳

梅揺る乃てろせよ竹乃杖杖口
柳抱くまののたれや海 緑 来之

春の神やけはひえ抱る人の教伊丹東瓦

伯弼日回山中よりせしうたう

雲水僧

元氣やけさふきあむ鉢坊主イセ雉庵
海苔の香つとらへえしよふりかぬイセ谷浦

白魚ハリス梅はれらる盛ハリスのん青蘿

唯知るそまそ雄をるるささ河几董
春の海海ももそるも柳柳より

冬二句

あるはるの扇つゝみりり尾筋の紅煙外東武曉景玉
美人の細江より入る小舟のり東武暮冬

春

弓よある竹のそよよ人老乃月重厚
玉うちに馬をあづける小舟の蝶夢
花の由日知むとてけりあり葦村

平安書肆橋仙堂梓行



